ルカ 15:1-3、11-32

15:1 （そのとき）徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。

15:2 すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。

15:3 そこで、イエスは次のたとえを話された。

15:11「ある人に息子が二人いた。

15:12 弟の方が父親に、『お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください』と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。

15:13 何日もたたないうちに、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄遣いしてしまった。

15:14 何もかも使い果たしたとき、その地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べるにも困り始めた。

15:15 それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって豚の世話をさせた。

15:16 彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物をくれる人はだれもいなかった。

15:17 そこで、彼は我に返って言った。『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。

15:18 ここをたち、父のところに行って言おう。「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。
15:19 もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください」と。』
15:20 そして、彼はそこをたち、父親のもとに行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。
15:21 息子は言った。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』
15:22 しかし、父親は僕たちに言った。『急いでいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。
15:23 それから、肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。
15:24 この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。』そして、祝宴を始めた。
15:25 ところで、兄の方は畑にいたが、家の近くに来ると、音楽や踊りのざわめきが聞こえてきた。
15:26 そこで、僕の一人を呼んで、これはいったい何事かと尋ねた。
15:27 僕は言った。『弟さんが帰って来られました。無事な姿

で迎えたというので、お父上が肥えた子牛を屠られたのです。』
15:28 兄は怒って家に入ろうとはせず、父親が出て来てなだめた。
15:29 しかし、兄は父親に言った。『このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか。
15:30 ところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる。』
15:31 すると、父親は言った。『子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。
15:32 だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。』」
---
放蕩息子の譬えとしてよく知られた話です。でも、この話はどこにでもありそうな、月並みな話なんです。
いえの跡継ぎは長男だけです。次男、三男は家をでなければなりません。そのとき手ぶらで出て行かせるわけにもいきませんから、財産のある家だったら、いくらかはお金をもたせます。そして、遊びほうけてすってんてんになるのはありそうな話で

す。ボロボロになって帰ってきた息子をおっぱらわずに暖かく迎え入れるというのも分かる話、いい話なんです。
ちょっとひっかかるのは「おやじさん、一言ぐらい文句をいってもいいかなあ、すこし弟に甘いんじゃないか」というていどです。

> 20 節：まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。

年寄りは威厳をもってどっしりかまえている、というのがユダヤの常識です。いまでも通用する世界の常識でしょう。
ここでご老人が「憐れに思い、走り寄る」おっちょこちょいにも思えるこの行動はこのたとえ話全体の大切な味付けになっています。

息子が「使用人にしてください」「そうか、お前そこまでいうのか」「おい番頭」「へい、ご主人様」「新しい使用人だ、面倒見てやってくれ」
もし話がこのように展開して、父が弟を雇い人あつかいしたら、兄さんも納得したんじゃないかなあ。
「お父さん、あいつも反省しているようだからなにもそこまでしなくても」ひょっとしたら調子にのって父親に「とりなし」したかもしれない。よく読んでみると、息子は反省した時の最期の台詞「雇い人の一人にしてください」をお父さんの前で

いっていない、まあ、お父さんも仕舞いまで言わせなかった。
それでもって、息子に晴れ着をきせて、牛を〆て、ドンちゃん騒ぎ・宴会を始めたわけです。
だから兄ちゃんは頭にきた。それで父親は兄もなだめなきゃいけなくなっちゃった。
この「宴会」が「放蕩息子の譬え」話のミソ、肝心なところです。そしてここから始まる「兄の怒り」こそイエスが語りたかった中心、話はここからが本番、です。

そもそもこの話はファリサイ人、律法学者に聞かせるためにイエスがはじめた譬え話です。
彼らは、イエスが徴税人や罪人と宴会しているのが気に入らなくてプンプン怒っていました。

ところで、兄はなんでプンプンしているか。
自分はこんなにがんばっているのに、これじゃ報われないとプンプンしている。
でも兄のがんばり、とは何でしょう。
ただ財産がほしいだけじゃないのか、父に気に入られるように、ひらすらつかえて、父の死ぬのを待って、ぜんぶ自分のものにしたい。権利を失うのが怖い、遺産はいったいどうなるのか、父親の顔色をうかがいながら、恐れと不安のうちに仕えてる。
兄は父を愛しているから仕えているのではない、お金ほしさに従順を装っているのではないか。

だからヤギ一匹、ニワトリ一羽、自分のために、楽しみのために食べることもできない。
しかし、父親はそんな兄の心のうちはわかっている、すべてお見通しです。
だから兄に、そうじゃないよ、「わたしのものは全部お前のもの」とかたりかけている。

兄よ、おまえも愛しているんだ、ここがイエスのいいたいところ、主の福音です。

さて、人間をどう理解するか。
一から十まで「いい人」、善人、正義の人、そういう人っていますか？いないでしょう。これは信仰のあるなしに関係なく、多くの人にとって真実ではないでしょうか。

「いい人」と信仰はどう関係しているのか。
不信仰は悪い人、信仰者はいい人でしょうか？
それとも、クリスチャンはいい人で、ムスリム、イスラム教徒は悪者、仏教徒はまあまあ、ヒンズー教徒は問題外。
こうなりますか？

> 「あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる」

はなしを兄にもどすと兄は弟は悪者だと思っている、たしかに

義の人じゃない。でも父からみるとそうじゃない。
「弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前」
弟に対する理解は父と兄ではずいぶんと食い違っている。

お前がバカにしているダメ弟だって天国にいける、なにしろわたしのところに帰ってきたのだから、だからいま宴会をやっているのだ、おまえはもちろん天国にいけるよ。
イエスは暗に「おまえが天国にいけるのだから、弟もいけるのは当たり前」と譬え話を通していっています。兄はそこが気に入らない、わからないのです。天国にいくのは、父に仕えてがんばってきた自分だけで、弟なんてだめに決まっている、そう思っているから、弟を歓待していることが気に入らない。

この放蕩息子のたとえの中には「悔い改め」という言葉はでてきません。17節に「我に返って」とあるだけです。それは来る、帰るという意味で「自分に帰る」という意味です。つまり弟はいわゆる悔い改めをしていない。
兄ちゃんは悔い改めてもいないのに宴会が開かれている、赦されている、受け入れられている、これが気に入らない。

どのように人間をとらまえるか、どのように自分自身をみつめるのか。
人間なんて全部が全部いい人もいなければ、頭のてっぺんから

つまさきまで悪人もいないよ。だめでどうしようもないけれど、まんざらでもないんだよ。神がそのことをわからないわけないだろ。神は人間をそのままで受け入れるよ、だいじょうぶ、あなたもそのままでいいんだよ。神のところに帰ってくれば、それでいいんだよ。このような見方が神の人間理解なのです。

この放蕩息子のたとえは福音のすべてが輝いてます。
神の無条件の赦しは、弟に対して一言も責めはありません。
走りよる、最高の服、指輪、靴、仔牛の宴会、このどれをとりあげても福音の中心が輝いています。
そして親子の愛のうえにたつ、信仰のあり方。この神の愛に対比される、兄の姿、ファリサイ人、律法学者。
どうぞこの譬え話を味わい、神の愛を受けとってください。